随想

大河ドラマにみる「お市の方」

戸山恵子
（会員　佐伯市匠南区）

大河ドラマの視聴率は幕末よりも戦国時代の方が断トツいいそうです。それは、女性も男性と同じように表舞台で活躍できたことが、現代人が見ても何の違和感も与えないからでしょう。出演者のほとんどが男性、しかも尊皇だ攘夷だと多少の予備知識が必要な幕末より、単純明快「強い者が勝つ」という倫理観と、信長・秀吉・家康の3人のキャラクターのちがいのおもしろさが加わり安心して見ていられるからでしょうか。

さて、今年も中盤にさしかかったNHKの大河ドラマ"功名が辻"、主人公の千代が、夫の一豊と二人三脚で大名になっていく出世物語なんですが、今回、もう一人のヒロインともいえる「お市の方」を演じている大地真央さん、彼女こそ、私の思い描いていたお市とピッタリあてはまります。「お市の方」は誰もが知っている戦国時代のミス日本!!といえる女性です。織田信長の妹で（多分母親は同じ）兄の戦略で近江の浅井長政に嫁ぎ、5人の子どもを生み、他ならぬ兄に攻められ、夫は自害、浅井家は滅亡。彼女は実家に戻りますが、今度は信長が「本能寺の変」で死亡、後継者問題から家臣の柴田勝家と再婚しますが、一年も満たないうちに秀吉に攻められ、勝家と共に自殺するというドラマチックな人生を送ります。

読者のみなさんはお市に対してどんなイメージがありますか？「運命に流され夫と共に死んだ貞女」「政略結婚の犠牲になった美女」そうなんですよね、彼女の肖像画は、現代人が見ても美人ですし、これは娘の淀殿が描かせたものですから実物に近いと思います。

昭和40年の「太閤記」の岸恵子さん、44年「天と地と」の若尾文子さん、53年「黄金の日々」松原智恵子さん等、お市を演じた女優さん方は、その美人のイメージにぴったりなのですが、残念ながら、彼女たちの役わりは歴史に翻弄された姿しか表現されていませんでした。

これは、まちがいとわかったのは、私も、お市が亡くなった38歳を過ぎてでした。

当時の大名クラスのお姫様は恋愛結婚なんていうのはありません。結婚は「両姓の合意のみ」成立するようになったのはこの六十年、戦後になってからです。大名クラスでは決して個人的なものではなく、家と家、国と国とのもので、女性は実家代表の外交官としての役割がありました。恋愛の経験なしで結婚するなんてカワイソウ……と思いがちですが、そもそもこの時代のお姫様は恋愛結婚など知らなかっただろうから。それは、洗濯機のなかった頃の女性が川でゴシゴシ洗っていても、私はかわいそう……と思わなかったはずです。

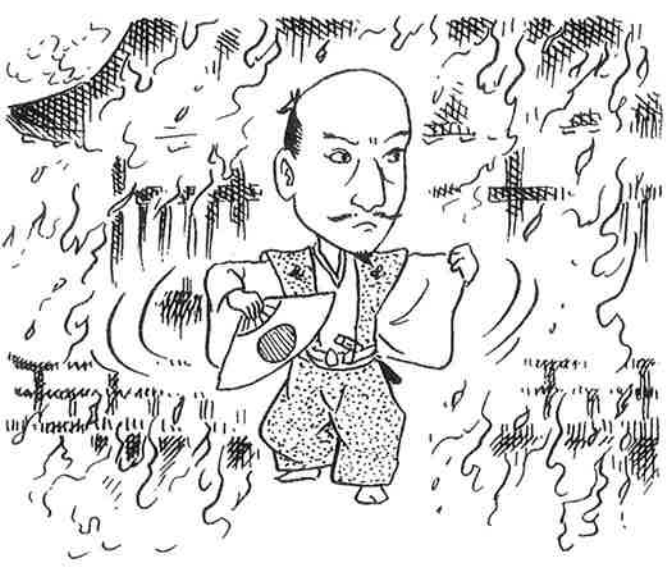
ですから、お嫁に行く女性の意識が無理やり泣く泣くなんてありえないのです。女性は実家の命運を背負って立つキーパーソンとして、嫁ぎ先に乗りこんでいくのです。彼女たちの役目は実家と婚家をジョイントする外交官、婚家はすなわち敵地にもなりかねませんから、一つの集団を彼女の指令で情報を探らせ、実家へ上手に通報します。特に織田・浅井のような大型大名同士なら、乗りこむ女性も賢くて政治手腕もなければいけません。親善外交だけではないのですから。

信長にはお市の方の他に何人もの姉妹がいたんですが、その中でなぜ彼女だけが他国の浅井家に嫁いだかというとやはり、彼女に政治的センスがあったからだろうと思います。（あとの姉妹は親族か部下、あるいは公家へ嫁いでいます）結果的には例の"小豆事件"（大河ドラマで取りあげたのは「黄金の日々」から）にみるような活躍をし、実家を救うことができましたが、逆に婚家は滅んでしまうことになりました。だからといってお市が長政を愛してなかったといえばそうではないでしょう。約7年間に5人の子どもが生まれています。結婚すれば夫にも婚家にも愛されることが重要ですし、産まれた男子が世

継ぎとなれば婚家とのつながりはよりいっそう強くなります。その他、婚家の奥向き、一族郎党への気配り、戦いとなれば留守を守る、それはそれは多忙な毎日だったはずです。千代やおねの生活です。すなわち、実家と婚家のバランスをいかに上手にとるかが戦国女性の力量なのですね。「独眼流正宗」の義姫、「毛利元就」の美伊姫等が、そのよい例です。

当時の女性にとって、実家の比重はかなり高く、むしろ結婚しても実家に片足をかけたままだったとみていいでしょう。日本の結婚の伝統的な形式は「通い婚」「婿取り婚」で、女性の財産権、相続権がなくなるのは江戸時代になってからです。実家をバックボーンにして、お市のようにかなりの発言力があったはずです。そして実家と婚家が戦いになった時は、彼女の役割は終わったとみなされ、実家に戻されるのがルールであったようです。「娘は返したぞ、これでしがらみはなくなった、正々堂々と戦おう!!」という騎士道精神ですね。

お市が後世に名を残すのは、二度目の結婚の時に、夫の柴田勝家と死んでしまうからで、これは秀吉をはじめ、当時の人々にしても想定外だった。だから人々の記憶に残り歴史に刻まれたのだと思います。妻は夫に従って死ぬのが美談なのは江戸時代以降、太平洋戦争が終わるまでです。



さて、お話しはいっぺんに佐伯に戻ります。お市と同世代、郷土史の中にそんな女性がいないかと思いまして。佐伯惟定の母がそうでしょうか。耳川の戦いで島津氏に父・叔父を殺された18歳の若き当主は、再び島津氏と戦うべきかの軍議の席上、母の助言で大友側につくことを決めたといいます。手元にある郷土史の本には、隣室で聞いていた…とあるのですが、やはりここは堂々と当主の横に座り発言したと確信しています。「島津打つべし!!」と。

又、惟定より数代前の惟治、彼の母は誰なのか?今調べてはいますが…。土持氏出身なのではないかというのが私の推論です。9代惟世から10代惟治、11代惟常、12代惟教のつながりが年代的にどうもわからなかったのですが、昨年の11月25日に龍護寺にて（惟治の命日にあたる）佐藤巧氏より佐伯氏の系図を見せていただき、やっと納得できた次第です。その系図を見ていると、惟治がなぜ日向方面に退却したのかが不思議に思えてきたのです。もし、兄の惟信と母が同じなら、海を渡り、伊予から豊前の宇佐を目ざしたはずです。（母、宇佐大宮司公佐の女）

現在でもいえることですが、人間、大ピンチに立たされた時は、とりあえず母方に身を寄せますよね。武田勝頼しかり、上杉謙信しかりです。惟治の母、あるいは妻が土持氏の出身であると推理すると納得がいく退却路です。土持氏とは元々親せきですから、自然なようですが。

又、惟治の長男千代鶴が、乳母の出身地である西野に身を隠したというのも、小谷城落城の時、息子達が、それぞれの乳母と逃げたのと同じです。昨年7月、図書館で発表させていただいた「毛利兵庫って誰?」、淀殿の弟を探せ!!」に何人もの方からご指導をいただき、とてもありがたく思って、ひきつづき調べていますが、やはり淀殿と母を同じくした弟は生きていたと確信しています。

母系というものは、古代から連綿と続いてきた家族制度で、（江戸時代から昭和の中ごろまでは抜けますが）母・妻が誰かということは、現代以上に意味を持ってくるのです。大河ドラマでいえば、義経と頼朝・時宗と時輔を思い出して下さい。正室と側室では他人以上の隔たりが生まれます。逆に母系を通して国の乗っ取りがスムーズにいくようにもなるんです。信長は妻のおかげで

美濃国を乗っ取る大義名分が成り立つし、秀吉が（大河ドラマ内で）お市を好きなのは、彼女が主筋にあたる織田家の人間だったこと、だから淀殿をはじめ織田家の女性達を側室にしているのです。さらに徳川秀忠が3男でありながら家督をつぐことができたのは、妻のお江が、秀吉の養女として豊臣家の、さらに浅井家の娘、織田家の姪、そして義理とはいえ柴田勝家の娘と、四重の王冠を持つお姫様だったからなのです。

何でこんなに長々と書きつづけるかといいますと、毛利高政の妻（出家して福寿院）彼女は木曽義昌の娘ですが、その母親は、真理姫といって、武田信玄と正室三条氏との子どもになるからです。

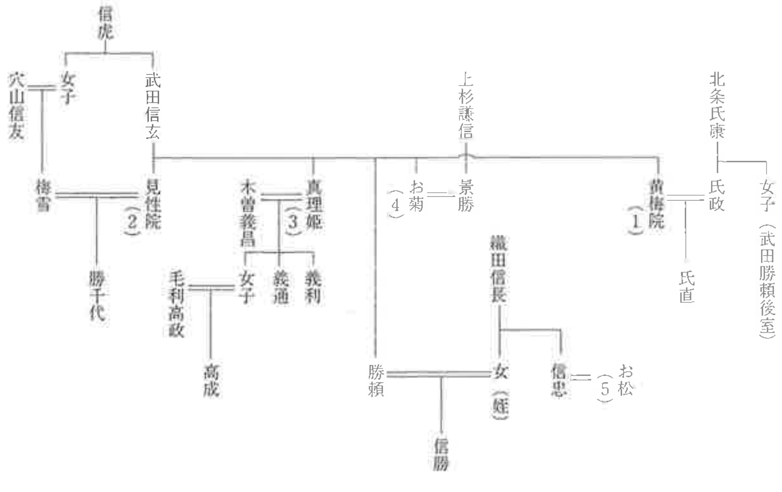
もう十八年前になりますが、佐伯史談にこの関係を紹介し、その後も関西の郷土史家の皆さんと文通し、武田勝頼研究会・松姫会と2つのサークルで仲間の方々から種々のご指導を受けて、ほぼ真理姫の生んだ娘にまちがいないと再発表させていただきます。

かくもここまでこだわるのかというと、あの本能寺の変の後、旧武田領をめぐり、周辺の大名達がそれぞれ、信玄の血筋という大義名分を立てて横取りしようとするからです。

まず北条氏政。彼の妻は信玄の長女、妹が勝頼の後妻になります。同じく上杉景勝。彼の妻も信玄の4女菊姫です。それから、一族の穴山梅雪。彼の母は信玄の妹、妻が信玄の次女と二重に武田家とつながっています。これら女系で考えると、もし、毛利高政がどこか甲斐の国の近くの領土だったら、きっと妻の領地であった木曽谷に入り、真理姫の悲願であった木曽家再興、ひいては毛利家の領地拡大につながったと思うからです。（系図A）

幼い頃、「太閤記」を見て私の歴史好きははじまりました。あの時の信長役高橋幸治さん、秀吉が緒方拳さんの

サクセスストーリーが史実とは異なることも多いことがわかりはじめるのが、肖像画とそっくりな夏目雅子さん演じる「おんな太閤記」（S56）の頃でした。史実では長身だったというお市にあてはまる「信長」（H4）鷲尾いさ子さんや「秀吉」（H8）頼近美津子さん、そして「利家と松」の田中美里さんや今年の大地真央さんこそ、あの当時の「お市」そのものの姿だと思います。実家のために働き、夫にも愛され、帰ってきてからも織田家再興のために再婚し、責任をとって自らの意志で死んでいく、彼女の意志の強さに身がひきしまるこのごろです。

（2006年5月1日記）

系図A（ ）は姉妹の生まれた順番